

南部製織保存会

小林輝子

はなわきにきわい、プライド、稻生町

毎年、本誌の表紙を飾る南部製織はいずれも南部製織保存会の作品。この製織保存会のまとめ役の小林輝子さんからお話を伺った。

小林さんのもう一つの顔、三本木高校と三本木農業高校の教諭時代からのなぎなたの指導者として存知の方も多いはず。そして、輝子さんは稻生町生まれの稻生町育ち。本誌「ちよこっと」も稻生町発。話題はおのずと稻生町。そして気分は昭和の稻生町へとタイムスリップしていった。

8月下旬、十和田の短い夏も終わり、秋の気配が漂い始める。

この頃、夕方になると、あちらこちらから太鼓の音が聞こえてくる。

三本木の風物詩、秋祭りの太鼓練習の音。

だれもがこの音を聞くと胸躍る。

9月9日、10、11日の3日間。街は秋祭り一色となる。

豪華絢爛、山車の前後を飾る華やかな行列、太鼓の音、笛の音、子供達の掛け声、

山車は市内の各所から出るが、じとに仮装の五丁目、山車の四丁目、この二つの町内の山車は豪華で、参加者も多く、勢いがあった。

少女達はここぞとばかり白慢の振袖を着て花笠をかぶり、街を練り歩く。

中でも、髪を桃割れの日本髪に結い、しだれ花飾りを肩に小粋に担いで山車の先頭を歩く「花かつぎ」はつい最近までも少女達の憧れの的だった。

少女達のその清楚で晴れやかな姿は、見物客の目を釘付けにしたものだった。



昭和32年頃 四丁目東映中央劇場前
成田食堂の2階窓からも大勢の見物人が乗り出しているのが見える



昭和35年頃 四丁目東映中央劇場前
映画「大菩薩峠」片岡千恵藏の絵看板が見える



花笠をかぶり、振袖を着て行列する少女たち



昭和20年頃
振袖姿の小学生輝子さん(左)
花笠の行列に参加した



なぎなたを持つ女地雷也

輝子さんは、高校時代に出会ったダンスをきっかけに大学へ進学、そして体育教師となつた。高校で教鞭をとる傍ら、当時、新たに競技として始まつたなぎなたの指導者として任命され、ゼロから学びながら生徒達を指導し、高校総体での強豪チームにまで育て上げ、多くの国体選手を輩出した。妹 菅野暎子さんが、この地域に古くから伝わる製織の技術を保存伝承すべく南部製織保存会を立ち上げた時も事務方として裏から支えた。急逝された菅野さんを偲んで開催された南部製織帯千本展（2007年8月十和田市民文化センター）では、全国の菅野さんの弟子達に呼びかけ、師匠と弟子の作品を一堂に集める企画を実現、全国の弟子達が作品とともに十和田に集まり、大成功を収めた。



昭和の稻生町。多くの住民が生活し、多くの買物客で賑わっていた時代。

稻生町は経済の中心であると同時に文化の中心でもあった。

かつて、この街を造った新渡戸家の人们が関東関西から職人や商人を呼び寄せさせたように、稻生町の人々は最先端の文化に遅れないと都会から、茶道、琴、踊り、謡、ピアノ、ダンスなどの師匠を招き定住させ、その文化技を学んだ。

そんな心意気のある稻生町。

ここで生まれ、ここで育つた輝子さんにとって、稻生町に生まれ育つたことは誇りであり、人生の骨骨になつてゐる語る。



戦時中の四丁目町内会
戦車の山車 頂上には鉄カブト姿の子供が乗っている

輝子さんは、高校時代に出会つたダンスをきっかけに大学へ進学、そして体育教師となつた。高校で教鞭をとる傍ら、当時、新たに競技として始まつたなぎなたの指導者として任命され、ゼロから学びながら生徒達を指導し、高校総体での強豪チームにまで育て上げ、多くの国体選手を輩出した。妹 菅野暎子さんが、この地域に古くから伝わる製織の技術を保存伝承すべく南部製織保存会を立ち上げた時も事務方として裏から支えた。急逝された菅野さんを偲んで開催された南部製織帯千本展（2007年8月十和田市民文化センター）では、全国の菅野さんの弟子達に呼びかけ、師匠と弟子の作品を一堂に集める企画を実現、全国の弟子達が作品とともに十和田に集まり、大成功を収めた。

